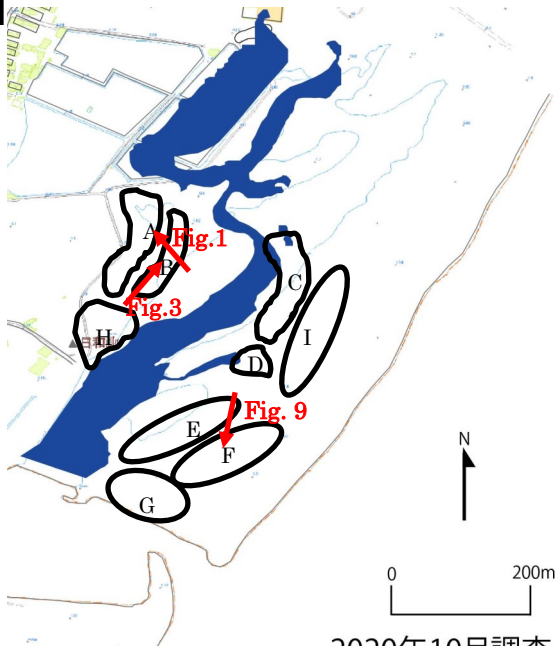


## 蒲生干潟の植物⑦



2020/10/15 調査エリア 2020年10月調査



Fig.1 エリアAを南東側から撮影



Fig.2 エリアAで撮影

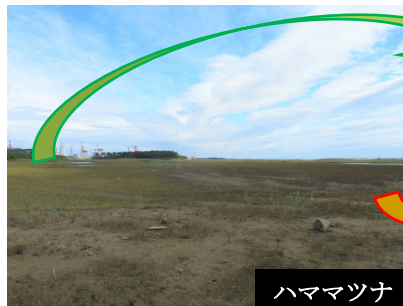


Fig.3 エリアBを南西側から撮影

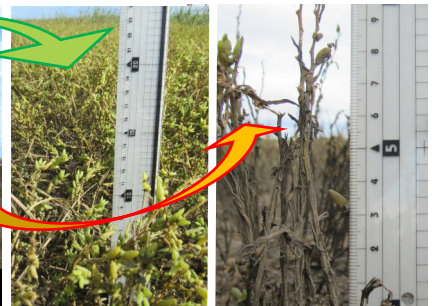


Fig.4

Fig.5

調査日時：2020年10月15日（木）9:45～11:15，天気：晴れ

先月と比べて、蒲生干潟周辺全体に緑が見られず、茶色が目立つようになった。エリアAを南東方面から見ると、前はヨシの先端付近が赤く色づき、種子の重さで穂全体が扇状に開いていたが、今回の調査では、それぞれの小穂に綿毛（基毛）が生え、先端付近が白っぽく見えるようになっていた。（Fig. 1, 2）。綿毛で風に飛ばされて種子がなくなった穂も、一部ではあるが見られた。エリアB, C, Eでは、ハママツナが群生しているが、どのエリアでも全体的に潟湖のより近くで生育した個体が枯れており（Fig. 5），潟湖から離れた場所で生育した個体（Fig. 4）と比較するとその差は明らかである。



Fig.6 エリアIで撮影



Fig.8



Fig.9 エリアFで撮影



Fig.10

Fig.11

8月の調査では、未熟な緑色の実をつけていたオニハマダイコンは、立ち枯れた状態になっていた（Fig.6）。葉はなくなり、茎もすべて枯れているが、先端に実をつけていた（Fig.7）。この実はコルク質で固く、砕いてみると中から褐色の種子が現れた（Fig.8）。オニハマダイコンは、北アメリカ原産の帰化植物である。エリアFでは、ツククサが未熟な実をつけており、カミソリで裂いてみると白い汁が出てきた。この汁はすぐに乾燥し白い粉状になったことから、種子に蓄えられたデンプンであると思われる。

（丹野美紀）